

日本の文化

藤田昌志

日本の文化

FUJITA Msasshi

【摘要】

文明は来源于法国的词语，文化は来源于德国的词语。考察历史、与该事情有
关联的问题和外国情况才能全面地了解该事物。本研究的构成如下：一 序 二 关
于文化・文明・日本論・日本文化論の考察 三 关于从历史上看的日本文化的考察
四 关于从《日本文化論》看的日本文化的考察 五 论及以外的其他文化。

キーワード：文化 文明 歴史から見た日本文化 『日本文化論』から見た日本文化

一 序

文化は文明と対義語のように用いられることがあるが、文明がフランス由来の語であるの
に対して、文化はドイツ由来の語である。二ではそのことについて述べてみたい。また、
日本論・日本人論・日本文化論の関係にも言及したいと思う。

三では歴史から見た日本文化一として、原始、古代、中世、近世、近現代（明治、大正、
昭和、平成）に即して日本文化の姿、特徴を考察する。

四『日本文化論』から見た日本文化 では主として敗戦後（1945年～）の日本の歩みの中
での『日本文化論』の代表作を通して、日本社会と『日本文化論』の関係を追ってみたい。

五 その他 では日本文化に関するその他の事柄である衣、食、住や和歌、俳句、日本の
義理、人情、恩、恥などについて言及してみたい。

二 文化・文明・日本論・日本人論・日本文化論

文明と文化はともに18世紀後半にフランスで作られた言葉である⁽¹⁾。文明 civilization
は主に啓蒙主義者とエコノミストによって広められたが、文化 culture は言葉としては13

世紀から存在し、土地の「耕作」や家畜の「世話」の意味から現在の意味に転化し、18世紀後半に独立概念として使用されるようになった。

文明、文化という言葉・概念は18世紀末から19世紀にかけてフランスからヨーロッパ諸国に広まったが、文明がフランスからイギリスやアメリカなどの先進国に広まったのに対して、文化はドイツを中心にしてポーランドやロシアなどの後発国に広まったという相違がある。文明概念が旧制度（絶対王制）の弊害を指摘し、それに代わる新国家（国民国家）を構想する中で設定され、人類の進歩（未来）と普遍性を強調するようになったのに対して、文化概念は人間生活の多様性と個別性に力点を置き、物質的な進歩に対して精神の優越を強調するようになり、未来よりは過去（伝統）が重視される傾向があった。文明はフランス型国民国家の価値観を表す国民的イデオロギーとして定着した。他方、文化は新しい国民国家の建設を模索していたドイツによって選択され、その独自の価値観を表明した。ドイツ・ロマン主義やフィヒテの「ドイツ国民に告ぐ」はドイツの文化概念がフランスとの対抗的關係の中で成熟していった例である。

文化概念は先進国に対する後発国の自己主張として第二次世界大戦後、第三世界の多くが文化=民族概念を強調することになったが、元来、文明と文化はヨーロッパの国家形成運動の中から生まれた双子であり、文化が優越性を確信すると普遍主義=文明に転化するし、その覇権を失うと文化主義に転換する。

日本文化論は①他文化との比較による考察②時代の中心国から周辺国が文化を摂取する「仕方」の考察③外来文化の影響が少なかった時期の日本の考察⁽²⁾——という3つの考察に分類されるが、①の例としては和辻哲郎『風土』、②の例としては内田樹（2009）『日本辺境論』、③の例としては本居宣長の「大和心」などが挙げられる。

青木（1999）は「日本人論」（私はこの論文で一括して「日本文化論」とよんできた）⁽³⁾と述べ、日本文化論の中に日本人論を包含させている。「日本人論」は日本に外国籍の人間が多数、在住している現在にはなじまない。また「日本論」は国民国家と親和性が高く、「国家」を超越する考えを持つ者には少し違和感がある。「日本文化論」の中に「日本人論」や「日本論」を包摂させるのが合理的かつ現実的であろう。もちろん既述の「文明」と「文化」の相違という一般的枠組みの中に「日本文化論」もあることを前提としての話である。

三 歴史から見た日本文化

三-1 原始

1万年前から紀元前300年頃までが縄文時代で、人々は主として狩猟、漁業、採集などによって生活していた。その後、3世紀までの弥生時代は稲作を行い、金属器を使い、日

本人の生活の原型が作られた⁽⁴⁾。

明治期、皇国史観が支配する中で縄文人は当時、日本人の祖先と考えられていた天孫族が日本に来る前に住んでいた先住民と位置づけられ、野蛮で低劣な存在と見られていた。戦後、戦前の弥生的なものによる皇国史観への反省から考古学分野で縄文的なものへの注目が高まり、各地で発掘・研究が続いている。岡本太郎は1952年（昭和27）「縄文土器——民族の生命力」を書き、縄文文化を高く評価してその空間性の表現や呪術的心性に注目し、縄文文化再評価の道を独力で開いた⁽⁵⁾。

三ー2 古代

古代（4世紀～12世紀）、日本の中国化を中心としながらも中国の日本化も存在した。日本は単なる辺境ではなく、聖徳太子の小中華主義もすでに存在している。もっとも太子は小中華主義だけではなく、外来の仏教と土俗の神祇を「両存する方針」を持っていた⁽⁶⁾。飛鳥文化は朝鮮の百済や高句麗を通じて伝えられた中国大陸の南北朝の文化の影響を受け、日本は中国化した。奈良時代は漢詩文を作ることが貴族の教養として重んじられ、『懐風藻』は現存最古の漢詩集で、六朝から初唐にかけての中国文化の影響が濃厚であり、ここにも日本の中国化が見られる。894年の菅原道真による遣唐使の廃止ののち、国風文化が育ち、カタカナ、ひらがなが発達して、それまでの漢文学に加えて和歌が公式の場でももてはやされるようになり、905年最初の勅撰和歌集『古今和歌集』が編纂されたが、これらは中国のものの日本化であった。

三ー3 中世

中世（12世紀末～16世紀）、武家がそれまで支配していた公家に代わって政権を握り、封建制度を築いていった。

1274年（文永11）と1281（弘安4）の2回の元軍の襲撃（蒙古襲来）=元寇は「内部における革新の気運」（たとえば後宇多天皇や後醍醐天皇による復古思想など）と呼応して起こったもので、日本の神々に祈願して日本が蒙古に勝ったことは、「日本くらい尊い国はないといふ」新思想を生み、それが根本になって、その頃、日本文化の独立が生まれたと内藤湖南は述べている⁽⁷⁾。

足利義満による朝貢形式による日明貿易という体面軽視外交はある意味では内政のために中国を利用したもので、日本はときどきそうした中国利用を行うことがある⁽⁸⁾。

室町時代には、禅宗の影響を受けた武家文化が伝統的な公家文化と融合しながら、民衆文化とも交流して、広い基盤を持つ文化が生まれた。

三－４ 近世

近世（16世紀末～19世紀半ば過ぎ）の信長、秀吉の時代には新鮮で豪華な趣を持つ桃山文化が生まれた。城郭建築はその代表で、内部の襖・壁・屏風には濃絵とよばれる金碧の彩色を持つ障壁画が描かれ、豪華さを加えた。障壁画の中心となった狩野派の狩野永徳は日本古来の大和絵と室町時代に隆盛した水墨画を融合させて、豊かな色彩と力強い線描、雄大な構図を持つ新しい装飾画を大成した。千利休は茶道を確立したが、利休の完成した佗び茶は簡素・閑寂を旨とし、華やかな桃山文化の中でそれと異なった一面を生み出した。

続く江戸時代初期の文化は幕藩体制が固まるにつれて、幕府の支配を反映した色合いが強くなった。学問では儒学が主流となり、君臣、父子、上下の秩序を重んじる朱子学が採用され、盛んになった。もともと山崎闇斎は儒教で神道を解釈し垂加神道を説き、中江藤樹や熊沢藩山は陽明学を学び、山鹿素行は朱子学を批判して幕府によって処罰を受け、伊藤仁斎・東涯父子は京都の堀川に私塾古義堂を開き、荻生徂徠も私塾を開いて自説を講義するというように中国の儒学は日本的展開を遂げた。それは中国の日本化であった。

元禄文化（17世紀終わり頃から18世紀初頭、上方を中心に発展した文化）は上方を中心に隆盛した町人文芸で、井原西鶴、松尾芭蕉、近松門左衛門などが出た。

化政文化（19世紀初頭から1830年頃までの文化・文政時代を中心とした江戸時代後期の文化）は江戸の繁栄を背景に、都市生活者の活力に支えられて広まったが、幕府の厳しい統制の中で退廃と無気力の風が満ち、風刺や皮肉の文芸が流行った。人々は愛欲と笑いを求める傾向が強かった。

三－５ 近現代

三－５－１ 明治

明治（1868年－1912年）時代を含む日本の近現代史は欧化の時代と回帰（国粹）の時代の交代によって特色づけられる⁽⁹⁾。明治の初期の十数年間（1868年～1883、4年頃まで）は欧化主義が支配的な時代で、その後、日清・日露両戦争をはさんで回帰（国粹）の時代が訪れる。（第二の欧化の時代は明治末年から大正時代、大正デモクラシーと呼ばれる時代を中心に1930年頃まで。その後、十五年戦争は第二の回帰の時代で1945年の敗戦までである。戦後の10年ほどが第三の欧化の時代で、60年代から第三の回帰の時代に入る。）2、30年周期で欧化と回帰のサイクルが繰り返される。

文明開化も明治5、6年頃に、因循とされるものが開国から鎖国に変化し、輿論が文明開化を礼讃するようになって世間でようやく認められるという経緯がある。1869年（明治2）12月、横井小楠が京都の御所近くで暗殺されたときにはまだ開国の方が因循と考えられて

いたのである。

因循とされるものが開国から鎖国に変化し、輿論が文明開化を礼讃するようになるには西洋の「万国公法」が与^{あず}かって力が有った。西洋の「万国公法」を新時代の普遍的価値と認めたことが価値観の転換を引き起こし、「公道」（＝万国「公法」）観念の流行が封建時代に訓練された所の道に対する気持ちと自由民権等の新理想の橋渡しをした⁽¹⁰⁾のである。日本人の現実主義という文化傾向は時代の趨勢を逸早くキャッチし、真逆の方向へ進むことに疑問を持たないようである。「万国公法」について補足すれば「万国公法」には旧と新の橋渡し役をしたプラス面とともに、欧米の植民地主義の理論的根拠となった（＝西洋人のような「万国公法」に則った「文明」に達しない「未開」「野蛮」の輩を西洋人が文明化するのには西洋人の歴史的使命であると西洋人は考えた）というマイナス面も存在する。

明治初年から明治 10 年までを狭義の文明開化期とすると、続く明治 11 年から明治 20 年までは自由民権の時代＝政治の季節であり、更に明治 20 年（1887 年）代の初めは日本的なものの再発見、保持による一種の復古主義が起こった精神革命の時代である⁽¹¹⁾。確かに明治 20 年＝1887 年にはフェノロサや岡倉天心の影響によって、西洋美術の教授から伝統美術育成に転じて、西洋美術を除外した東京美術学校が設立されている。（先立つ 1884 年（明治 17）には法隆寺の夢殿の秘仏がフェノロサ、天心によって発見されている。）

日清戦争の最中には志賀重昂の『日本風景論』がベストセラーとなり、日本の自然の雄大さを称揚するその本は国威発揚に大いに貢献した。

日清戦争後、三国干渉によって遼島半島の返還を余儀なくされた日本はロシアを仮想敵と定め「臥薪嘗胆」をスローガンに日露戦争までの 10 年を過ごす。

日露戦争後の自然主義文芸の隆盛については一応の経済発展を遂げるとどの国も個人中心主義が生まれることの証左と考えられる。現今の村上春樹のベストセラー現象、中国（台湾、大陸）での村上春樹現象も同様の理由によるものと考えられる。

中国はかつて日本にとって文化的に尊崇の対象であったが、日清戦争、日露戦争を通して「一等国」になった日本から見ると、国家形成能力のない存在と中国を下に見る考えが流布した。もっとも内藤湖南のような日本と中国の両方を視野に入れてすぐれた文化論を展開する人も出現した。湖南の日本文化研究は 1924 年（大正 13）『日本文化史研究』という形で結実している。

三－５－２ 大正

大正から昭和初期にかけての文化の特色は、大衆文化の成立と発展である⁽¹²⁾。都市を中心とする知識層がその大衆文化の推進をになった。第一次世界大戦後、日本では本格的

な工業発展に伴い、都市化が進んで、明治初期に約 3300 万人だった内地人口は大正末期に約 6000 万人になり、増加人口は大都市の第二次・第三次産業にその多くが吸収された。大都市には鉄筋コンクリートの建物が建ち並び、個人の住宅にもガス・水道が普及し、農村でも電灯が広まった。都市ではサラリーマンが大量に出現し、女性の職場進出も盛んになった。

1920 年（大正 9）には義務教育の就学率が 99%を超え、文字を読めない者はほとんどいなくなった。1918 年には大学令が制定され、単科大学や公・私立の大学設置が認められ、学生数が増大した。高等機関の充実によって都市の知識層が大幅に増えた。第一次世界大戦や関東大震災などの大事件の報道を通じてジャーナリズムが発達し、そのことは文化の大衆化を促進した。有力新聞の発行部数が 1920 年代半ばには 1 日 100 万部前後に達し、1920 年代後半には一冊一円（円本）の文学全集や文庫本が登場し、出版物が安価で大量に発行されるようになり、ラジオが 1925 年（大正 14）から放送を開始し、ニュース速報に役立った。都市を中心として、大衆の生活も洋風化、近代化し、男性から洋服が普及し、トンカツ、カレーライスなどの洋風食べ物が流行した。アメリカ文化をまねたモボ・モガが流行し、大衆はアメリカ文化に親しみを持ち、それを支持した。それは知識人の大正教養主義よりずっと大きな影響力を社会に持ち、アメリカ文化が家族主義を基本としていたことから、大衆の中でそれが支持されたことは次の国家主義の隆盛の温床となったとも言える。

三－五－三 昭和

昭和は前期（1926 年（昭和元）12 月 25 日～1945 年（昭和 20）9 月 2 日（日本が降伏文書に調印した日）、中期（1945 年 9 月 2 日～1952 年（昭和 27）4 月 28 日（サンフランシスコ講和条約が発効する日）、後期（1952）年 4 月 28 日～1989 年（昭和 64）1 月 7 日（昭和天皇崩御の日）に分かれる。

昭和前期は戦争の時代で 1927 年（昭和 2）の第一次山東出兵から 1931 年（昭和 6）9 月 18 日の柳条湖事件を発端とする満州事変、1937 年の日中戦争の開始と、日本は中国に侵攻していった。その戦い方は相手を殲滅するか、自らが殲滅されるか、といった戦略しか持ちえない、長期的展望がないまま短期的視点で兵力を逐次投入する決戦戦争（殲滅戦略戦争）のそれであった⁽¹³⁾。天皇への無窮の恩に報いることを至高の価値とする教育によって人々は戦争に駆り立てられ、戦地に赴いた。以上の決戦戦争的発想や皇恩へ報いるといったことは日本の特徴的文化傾向である。

昭和中期はアメリカによる占領支配の時代で具体的には GHQ が戦後 7 年間日本を占領支配した。占領時に生まれた、ただアメリカの言うことに迎合すればいいという姿勢=「占

領根性」は対米追隨的態度として日本人の中にしっかり定着し、占領期、日本人は GHQ の方針に反対するような新聞、雑誌の記事を「自主検閲」した⁽¹⁴⁾。経済的に豊かなアメリカのようになれば心も豊かになるはずだと日本人は「アメリカ幻想」を持ち、高度経済成長の道をひた走ることになる。

昭和後期、吉田（茂）路線といわれる軽武装・通商国家の路線を選択した日本はアメリカのアジア戦略に組みこまれ、1960年代の高度成長時代を走り抜けた。アメリカ文化の影響は大きく、その影響は衣、食、住にわたる。和洋折衷文化も健全であるが、日本文化について内省する必要があるほどアメリカの影響は大きい。

三－５－４ 平成

1989年（平成元）12月2日、ブッシュアメリカ大統領とゴルバチョフソ連書記長がマルタ島で会談し、翌3日冷戦終結を確認した。皮肉なことに冷戦終結によってアメリカの最大の経済的脅威が日本となり、アメリカの軍事力維持のために、新たなアメリカの脅威が必要となり、イラク・イラン・北朝鮮という「ならず者国家」がクローズアップされることとなった⁽¹⁵⁾。

1990年（平成2）10月日本のバブル経済が崩壊し、経済的低迷がその後20年以上続き、中国の経済成長は、日本に「脅威」となり、日本の小中華主義を増大させる結果となった。日本の文化は相変わらずアメリカの多大なる影響下にあるが、日本独自の文化、たとえば「おもてなし」や日本料理、アニメなども注目を浴び、日本の個別性をアピールし、外国から観光等で日本を訪れる人々は増加の一途をたどっている。

四 『日本文化論』から見た日本文化

四－１ 『日本文化論』の問題

『日本文化論』について「全体性」が問題にされることがある。たとえばルース・ベネディクトの『菊と刀』には「過去と現代をひとまとめにして日本人の国民性一般として説いている」⁽¹⁶⁾、「日本人全体を同質の人間として捉え、階層や職業による差異を見逃している」⁽¹⁷⁾（川島武宜）、^{たけよし}「義利」は武士の振舞いの全体を指し、現代では社交の慣例程度の意味で、この二つを同一視して、そこに「一貫した文化の型」を見るなど、資料に対して不用意だ⁽¹⁸⁾（和辻哲郎）という批判がなされている。日本人、日本の文化は細分化された精緻な^{みづか}「分析」を好み、異なったものを「総合」することを嫌う面があるのかも知れない。もっとも青木（1999）のように、「提出された「資料」の分析に基づいた上で「想像力」を発揮するところに生まれるホーリスティックな「全体像」も得難い学問的所産であ

ることを認めないでは、「解釈と想像力」による「質的」な研究は生れようがない⁽¹⁹⁾と「全体像」を尊重する考えもある。

また、『日本文化論』については状況・時代依存性が問題にされることがある。四-2、四-3、四-4で述べる否定的日本文化論（四-2）や相対的日本文化論（四-3）、肯定的日本文化論（四-4）も時代や状況への依存性が高いものである。

更に『日本文化論』について、その「客観性」が問題視されることがある。たとえば山本七平の『空気の研究』や『日本教について』は本当に日本特有の現象なのか、はなはだ疑わしい⁽²⁰⁾という識者の言辞もあり、とりもなおさず客観性が問題とされている。

四-2 否定的日本文化論から見た日本の文化

青木（1999）を基礎として戦後日本の文化について否定的、相対的、肯定的の各日本文化論との関係で以下、述べてみたい。

まず否定的日本文化論から見た日本の文化について。敗戦後1945年から1954年までを青木（1999）は「否定的特殊性の認識」⁽²¹⁾の時期とするが、その時期が否定的日本文化論の時期である。この時期、日本は1952年までアメリカの占領支配を受け、日本文化を否定的にとらえる考え方が主流を占めた。戦後復興期でもあるこの時期、1946年（昭和21）4月、坂口安吾は『墮落論』を書いて「墜ちる」ことに意味を見出し、デカダンの中に自らを発見し、救う道を求めた⁽²²⁾。

アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトの『菊と刀』について、ベネディクトはそんなことを言っていないのに、日本人は欧米の「罪の文化」に対して、日本の「恥の文化」は劣っていると取り、日本文化を否定的なものと考えた。敗戦の中で否定的日本文化論が当時のエトス（基礎的な精神的雰囲気）によって求められた結果であろう。

この時期を一番、代表するのは法社会学者、川島武宜たけよしによる日本社会の批判的分析と政治学者の丸山眞男による日本ファシズム批判である⁽²³⁾。川島武宜は「家族」の性格を検討することによって日本社会批判を行い、日本の家族的原理を民主主義の原理と対立するものと考え、その『否定』なくしては、われわれは民主化をなしとげ得ない⁽²⁴⁾とした。日本の「家族的原理」の主要特徴として、一、「権威」による支配と、権威への無条件的服従 二、個人的行動、個人的責任感の欠如 三、自主的な批判・反省を許さぬ社会規範 四、セクショナリズム——を挙げ、それらの「否定」によってしか日本の民主化は実現せず、非近代的な家族意識を「否定」しなければならないとした⁽²⁵⁾。

この時期の日本社会の位置づけは「否定的特殊性」を主張するもので、その主張には①マルクス主義的な発展段階による日本社会の位置づけと②「近代化論」からとらえるもの

——の二つの立場があった。①は日本社会をブルジョワ革命以前の前近代的段階にあるとする見方であり、「日本文化」も封建的社会関係の生みだした遺制とし、②は西欧の近代合理主義を評価の基準にすえて日本社会を見て、日本の「非合理主義」を批判し、日本社会を市民社会と民主主義の未発達な「前近代社会」と考えた。①も②も日本の仰ぐべきモデルを「欧米」社会と考え、日本社会の「後進性」を批判し、日本文化を「否定」し、遅れたもの、劣ったものとしてとらえた⁽²⁶⁾。

四一三 相対的日本文化論から見た日本の文化

1955年から1963年は「歴史的相対性の認識」の時期⁽²⁷⁾で「否定」の見直しがなされる相対的日本文化論の時期である。相対的な日本文化論は「否定的」日本文化論から「肯定的」日本文化論へ向かう中で「橋渡し」の役割を担い、この時期にはトインビーの著作の紹介や翻訳が出て「比較文明論」への関心が高まったことが特徴の一つとして挙げられ、この関心は「一系的」進化論や発展段階論、近代主義の示す「西欧中心主義」に対する懐疑や反発の出現に呼応している⁽²⁸⁾。歴史的相対性の認識の時期の相対的日本文化論はそうした状態で比較文化的あるいは比較文明的な、世界における日本文化・社会の位置づけを行った⁽²⁹⁾のであり、具体的には加藤周一の「雑種文化論」、そして梅棹忠夫の「文明の生態史観」が挙げられる。

加藤周一の「雑種文化論」＝「日本文化の雑種性」は、日本文化を日本的なものと西洋化したものが深いところで絡んでいる雑種文化の典型⁽³⁰⁾と考えた。「日本」は日本と西洋の「折衷」であり、この「二つの要素」からなる「雑種」以外の何ものでもなく、そこには日本近代を「西洋化」一辺倒で見ることから「伝統への回帰」で見ることから“自由”でありたいという主張がこめられている⁽³¹⁾。加藤のこの指摘はあくまで現代日本を考える場合のことであり、中国の影響は中心にされていない。加藤の「雑種文化論」は一般的には次のように「読解」された。日本文化は「雑種」文化であるがゆえに、そこに「欧米」とはちがった可能性を見出すべきであり、それは又、大衆が享受している生活実感としての「雑種性」を大事にすべきだと明言していることでもあり、その主張は、当時の日本人を大いに勇気づけることになった⁽³²⁾。

「雑種文化論」が出てから2年後に、梅棹忠夫の「文明の生態史観」が現われ、梅棹は加藤の「雑種文化」の積極的認識を一段と進めて、西欧と日本の「文明」の「平行進化」を主張した⁽³³⁾。梅棹は旧世界を横長の長円にたとえ、第一地域はその東の端と西の端の日本と西欧で、第二地域を残りのすべて、中国・インド・ソビエトなどとし、西欧と日本の近代の歴史を「平行進行」と考え、それは生態学的な位置と歴史的過程において、大変

似た条件を持っていたから「平行進化」の道を歩むことになったのだとした⁽³⁴⁾。

加藤と梅棹の日本文化論は日本の「独自性」の主張であり、先進「欧米」諸国との類似性を強調するその認識は、日本（人）の「自信回復」に大きく役立った⁽³⁵⁾。

四－４ 肯定的日本文化論から見た日本の文化

青木（1999）は「肯定的特殊性の認識」の前期を（1964～76）とし後期を（1977～83）と設定し、後期の「日本文化論」（肯定的日本文化論）には、それまでにみられた「西欧＝近代」モデル批判へのためらいが、表面的にはみられなくなる⁽³⁶⁾としている。そのことはとりもなおさず、濱口恵俊（1977）『「日本らしさ」の再発見』が「日本らしさ」について今までなかった行動的科学的公準の設定を提案し⁽³⁷⁾、「相互依存主義」「相互信頼主義」「対人関係の本質視」という特徴を持つ「間人主義」こそ西洋の「個人主義」に対する、日本人の特性だと主張する⁽³⁸⁾ことが示しているように、日本社会が経済的発展を遂げて、「欧米」に並ぶ「大国」になったこと的位置づけをどのようにするかということをも日本（人）自らが考えようという気持ちがこの時期（後期）の「日本文化論」を支配していた⁽³⁹⁾ことを意味している。

前期（1964～76）に戻ると、中根千枝（1967）『タテ社会の人間関係』講談社は前期の代表的日本文化論であり、中根は本書で個人の資格より集団の「場」（たとえば自分の属する職場、会社、官庁等）を重んじるのが日本の「集団主義」のあり方であるという考え方を提示している。中根の（1964）「日本の社会構造の発見」と異なり中根（1967）は日本社会が「タテ社会」であるとの説として国の内外で「通説」として語られるようになった。中根の「タテ社会」論は日本社会の特質を示すものとして、日本人に歓迎され、日本近代化の「成功」、企業の「集団主義」を肯定的に「日本人の血」による本質的なものとして積極的に評価する「論理」を提出するものとして認められた⁽⁴⁰⁾。高度成長という時代状況に依存し、それを反映したのが中根の「タテ社会」論であったが、現在でははたして日本の特徴と言えるのかという批判もある⁽⁴¹⁾。

土居健郎（1971）『「甘え」の構造』は中根（1967）の社会論的アプローチとは異なり、精神分析と心理分析による日本文化論である。土居の日本文化論は、日本人の心性と人間関係の基本に「甘え」があり、土居はそれを私的、閉鎖的であると批判すると同時に「無差別平等性」を尊び「寛容」でさえあると評価し、日本人の社会関係や集団にとって積極的な肯定的意味を持つと述べている。それは従来の「日本文化」の性格への否定的評価の「逆転」を意味しており、日本文化への肯定的認識であった⁽⁴²⁾。

その他、前期には尾高邦雄（1965）『日本の経営』中央公論社や木村敏（1972）『人と人

との間』弘文堂、三島由起夫（1968）「文化防衛論」があり、いずれも日本文化への肯定的認識を提示している。

後期には、既述の濱口（1977）以外に村上泰亮等（1979）『文明としてのイエ社会』中央公論社、エズラ・ヴォーゲル（1979）『ジャパン・アズ・ナンバーワン』TBS ブリタニカが出版され、基調は自信を持った日本文化論（前者）とそれへの賞賛（後者）という肯定的日本文化論である。

五 その他の日本の文化

日本文化と言うとき、大きく分けて茶道や華道、能、歌舞伎という伝統文化と生活の中にある文化の二つがある⁽⁴³⁾と考えられる。以下、そのことに留意して論を進めたいと思う。

まず日本の伝統文化については、それを「道」にする傾向があることを指摘したい。華道、茶道、柔道、剣道、合気道と「道」をつけるものが多い。武士道は鎌倉時代から発達し、江戸時代に大成した武士階層の道徳体系であるが、特徴の一つは尚武・名誉であり、それは相手に勝つことを意味した。ただし、力づくで他者を圧倒するのではなく、自分自身に勝つことによるのみ他者に勝ちうるという精神的鍛錬を含んでいた。自己に勝つとき、はじめて強さは形成されると考えるから、質素・儉約などが重視された⁽⁴⁴⁾。「道」とはそうした自己修練による克己と深い関係がある。

衣については、現在、日本の伝統的衣装である着物（和服）は特別なハレ（晴レ）の日や茶道、生け花などで着られることが多く、ふだん着は洋服が普及している。

食は日本人は雑食で主食もパン、米、麺となんでも食欲に採り入れている。パスタや米粉^{ビーファン}も定着している。一つで炭水化物も肉、魚、そして野菜も食べられる丼物やラーメン類、鍋料理（米などはシメで雑炊^{ぞうすい}などにして食べる）も人気があり、すし、刺身、すき焼き、天ぷらは外国人観光客にも好評な食べ物である。日本人は食に食欲で世界中の食べ物を取り入れて、日本化することに生きがいを感じているようである。そこには日本人の新奇なものを好み、次から次へと新しいものを求めていく文化（＝傾向）が存在する。

住は和洋折衷が多く、こたつや布団、畳はその中で和風のものとして生き永らえているが、和風の障子や床の間は消滅の危機に瀕している。床の間の消滅によって掛け軸や額縁^{がくぶち}も消えていく運命にある。

日本列島は南西諸島が亜熱帯気候に属すほかは、ほぼ温帯に属する。夏は高温多湿、冬は北西の季節風が吹き込んで寒くなる。日本の気候の特色は、季節がはっきりしていること、温帯の中でも最も降雨量が多いことである。日本人は季節感が鋭く、それが美意識に

反映して日本人の感性を形成してきた⁽⁴⁵⁾。俳句には季語を詠み込むが、それは対象の要点を押さえて省略すべきことは省略することが不可欠な俳句の一手法であり、正に季節感に敏感な日本人の特徴をよく表している⁽⁴⁶⁾。

その他、日本の文化には正月、おせち料理、成人の日、春分の日、花見、子供の日、七夕、終戦記念日、秋分の日、文化の日、クリスマス、大晦日などの年中行事、祝祭日があり、ペットの動物を家族扱いする文化、小宇宙を作り出す盆栽などや漫画、アニメなどのサブカルチャーもある。

軽薄短小を好み、「美しい」ことより「可愛い」ことを尊ぶ文化は外国人にも受け容れられ、支持されている。

宗教面では神仏習合に見られるように、宗教の対立よりは融和を重んじる傾向 (=文化) が顕著なのは、闘争より平和を重んじる日本人の現実主義の表れであろう。

日本の国粹主義と排外主義は両存しており、排外主義も進んだ欧米などに対してはその傾向が著しいが、発展途上国に対してはむしろ排外主義に傾くことが多く、とりわけ隣国との間ではその文化的相違についても十分な研究がなされておらず、日本文化の研究も今後は比較文化学の中で位置づける必要があるであろう。

明治維新以後は欧米崇拝を中心として日本は歴史の歩みを刻んできたが、明治以前、中国に対して文化的には「尊崇」し、政治・軍事的には「脅威」とみなし、また「小中華主義」を中国に対して持っていたと言えよう⁽⁴⁷⁾。

今後の日本文化はアメリカの影響を相変わらず強く受けつつも、本来の持ち味を伸ばして、日本は政治的、軍事的にではなく、文化的に世界貢献する国になるのが望ましいと言える。

六 結び

以上、日本の文化について二、三、四、五と考察してきたが、日本文化とは外部との関係で醸成されてきた「美酒」のようなものである。私見では文化とは傾向である。日本人は「狭量」だと言ったのは魯迅の弟の周作人であるが、たしかに視野の狭さはマスコミによる隣国の報道にも表われていて、一面的な、マイナス面の報道しかしようとしなない(2015年9月現在)。

人はなぜ『日本文化論』を求めるのかと言うと「敗戦国である日本の、自尊心を取り戻したいという気持ち、あるいは逆に、もっと強烈に反省したいという気持ちがあり、あるいは自国文化論というのは何も日本特有の現象ではなくて、それは要するに近代的な国民国家というものができて以来、国民は自国のことを何より気にするようになってしまった

という風に説明できるだろう」⁽⁴⁸⁾ という識者の言辭は「日本の文化」にも言えることであり、国民国家のアイデンティティーに不安を感じ、自らを肯定的に、また否定的に、はたまた相対的に評価したいという情動が「日本の文化」についての注視、探究に向かわしめるのであろう。国粋にせよ洋外（かつての洋中、明治以後の洋欧米、敗戦後の洋米）にせよ、ともかく「日本の文化」のとらえ方は常にそうした外部に依存的であったことには留意しておく必要があるであろう。そして、自文化と他文化のプラス面、マイナス面両方を評価できる人間になるために「日本文化」（論）の探究をその外部依存性という特徴に留意しながら、今後も続けたいと考えていることを記し「日本の文化」の記述をひとまず終えることにしたいと思う。

〔注〕

- (1) 以下の文明と文化についての記述は西川長夫（1998）に基づく。
- (2) 日本人論—Wikipedia（2013.3.18 閲覧）参照。
- (3) 青木保（1999） p.143
- (4) 以下の「歴史から見た日本の文化 原始、古代、中世、近世、近現代」は藤田昌志（2012）、同（2014）の関係する記述に負うところが大きい。
- (5) 大久保田喬樹（2003） pp.195-206
- (6) 内藤湖南（1924）「聖徳太子」 内藤虎次郎（昭和 44） pp.56-59
- (7) 内藤湖南（1922）「日本文化の独立」 内藤虎次郎（昭和 44） pp.123-124
- (8) 小倉和夫（2013） p.85 藤田昌志（2015） p.29 p.36
- (9) 以下の欧化と回帰（国粋）の記述は西川長夫（2013） pp.106-112 に負うところが大きい。
- (10) 吉野作造（1927）「我国近代史に於ける政治意識の発生」吉野作造（1995） pp.227-228
- (11) 高坂正顕（1999） p.160 p.326
- (12) この大正の記述は藤田昌志（2014）に負うところが大きい。
- (13) 小林英雄（2007） pp.14-15
- (14) 孫崎享（2012） pp.124-128
- (15) 孫崎享（2012） pp.313-314
- (16) 南博（1994） p.198
- (17) 南博（1994） p.198
- (18) 南博（1994） p.199
- (19) 青木保（1999） pp.44-45
- (20) 小谷野敦（2010） p.119

- (21) 青木保 (1999) pp.56-67
- (22) 青木保 (1999) pp.59-60
- (23) 青木保 (1999) p.62
- (24) 川島武宣 (1948) 川島武宣 (1983) p.15
- (25) 青木保 (1999) pp.63-64
- (26) 青木保 (1999) pp.64-67
- (27) 青木保 (1999) pp.68-85
- (28) 青木保 (1999) pp.84-85
- (29) 青木保 (1999) p.69
- (30) 南博 (1994) p.205
- (31) 青木保 (1999) p.71
- (32) 青木保 (1999) p.74
- (33) 青木保 (1999) p.74
- (34) 青木保 (1999) pp.76-77 南博 (1994) pp.277-278
- (35) 青木保 (1999) pp.83-84
- (36) 青木保 (1999) pp.86-133 p.117
- (37) 青木保 (1999) p.117
- (38) 青木保 (1999) p.119
- (39) 青木保 (1999) p.119
- (40) 青木保 (1999) p.95
- (41) 小谷野敦 (2010) p.99
- (42) 青木保 (1999) pp.105-107
- (43) 青木保 (1999) p.16
- (44) 藤田昌志 (2012) p.11
- (45) 藤田昌志 (2012) p.52
- (46) 藤田昌志 (2012) p.14
- (47) 藤田昌志 (2015) p.37 pp.40-41
- (48) 小谷野敦 (2010) p.223

〔引用文献・参考文献〕

- (1) 西川長夫 (1998) 『国民国家の射程』 柏書房
- (2) 藤田昌志 (2012) 『日本文化概論 I 一地理編・歴史編 1 (原・古代・中世・近世) 一』 私家版

- (3) 大久保田喬樹 (2003) 『日本文化論の系譜』中央公論新社 中公新書
 - (4) 藤田昌志 (2014) 『日本文化概論Ⅰ—地理編・歴史編 2:近現代Ⅰ(明治・大正)一』私家版
 - (5) 内藤湖南 (1924) 「聖徳太子」 内藤虎次郎 (昭和 44)
 - (6) 内藤虎次郎 (昭和 44) 『内藤湖南全集』第九卷 筑摩書房
 - (7) 内藤湖南 (1922) 「日本文化の独立」 内藤虎次郎 (昭和 44)
 - (8) 小倉和夫 (2013) 『日本のアジア外交 二千年の系譜』藤原書店
 - (9) 西川長夫 (2013) 『植民地主義の時代を生きる』平凡社
 - (10) 吉野作造 (1927) 「我国近代史に於ける政治意識の発生」吉野作造 (1995)
 - (11) 吉野作造 (1995) 『吉野作造選集』11 岩波書店
 - (12) 高坂正顕 (1999) 『明治思想史』燈影舎
 - (13) 小林英雄 (2007) 『日中戦争—殲滅戦から消耗戦へ』講談社 講談社現代新書
 - (14) 孫崎享 (2012) 『戦後史の正体 1945-2012』創元社
 - (15) 南博 (1994) 『日本人論—明治から今日まで』岩波書店
 - (16) 青木保 (1999) 『「日本文化論」の変容
戦後日本の文化とアイデンティティー』中央公論新社 中公文庫
 - (17) 小谷野敦 (2010) 『日本文化論のインチキ』幻冬舎 幻冬舎新書
 - (18) 川島武宣 (1948) 「日本社会の家族的構成」 川島武宣 (1983)
 - (19) 川島武宣 (1983) 『川島武宣著作集』第十卷 岩波書店
 - (20) 藤田昌志 (2012) 『日本文化概論Ⅳ—キーワード編—』私家版
 - (21) 藤田昌志 (2015) 『日本の中国観Ⅱ—比較文化学的考察—』晃洋書房
- [引用文献・参考文献]は最小限度に留めた。詳しくは本文を御覧いただきたい。